

文献紹介

田中洋美・M. ゴツィック・K. 岩田ワイケナント（編）

ライフコース選択のゆくえ  
——日本とドイツの仕事・家族・住まい——

2013年，新曜社，ISBN 978-4-7885-1324-2，定価（4,200円＋税）

魚住明代

2010年10月に明治大学で開催された国際会議「ライフコース選択の臨界点 Life Courses in Flux」（ドイツ日本研究所・明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター共催）の中で生まれたアイデアを基に編集された研究書である。「雇用の不安定化が進み，結婚や出産行動が変わる中で，個人のライフコースはどのように変化しているのだろうか」という問いのもと，仕事（職業キャリア），家族（家族キャリア），住まい（居住キャリア）の3領域の変化に焦点を当てて，包括的に個人のライフコースの変化を捉えることを目的としている。その際の分析軸は，「個人の生き方」「ジェンダー」「国際比較」である。国際比較の対象にドイツを選定した理由は，遅れた近代化，戦後の経済発展等の共通項があることに加え，伝統的性別役割分業に依拠した社会福祉体制を持つ点でも日本と類似していることにある。

本書は5部から構成されており，日独12名の研究者が全15章を執筆している。紙幅の制限から，ここでは本書の内容をかい摘んで紹介させていただく。第I部「ライフコースへのアプローチ」の第1章『『人生の多様化』とライフコース——日本におけるライフコースの制度化・標準化・個人化——』（嶋崎尚子）では，日本女性のライフコースが戦後の制度化・標準化を経て多様化しつつあるが，自由な選択が困難な環境的条件のもとでどこまでそれが可能なのか，ヨーロッパ・モデルと対比しながら論じている。つづく第2章「ライフコース・ライフストーリー・社会変動——ドイツ語圏社会科学におけるバイオグラフィー（人生経歴）・アプローチ——」（ベッティナ・ダウンジーン）では，ドイツ語圏にお

けるライフコースおよびバイオグラフィー研究に関する理論的概念的議論が丹念に整理されている。第II部「仕事を巡る生き方の変化」では，雇用環境の多様化に伴う生き方の変化を扱っており，雇われない働き方やサラリーマンマンガに描かれた男女のライフコース，メディア産業で働く人びとの声などをもとに，日独の新しいライフコースを分析している点が新鮮である。第III部「結婚・家族観の持続と変容」では，働く独身女性のライフコースや，テレビドラマに表れたライフコースの脱標準化に加え，村上春樹の小説を題材とするライフコースの描写，日独両文化からみた子育ての意味の変化等が示されている。例えば第11章『『新しい父親』の発見』（ミヒャエル・モイザー）は，現代ドイツにおいて，有子女性の労働市場への参入が男性の人生設計や家族観の変容を迫っている様を描き出して興味深い。第IV部「住まいからみる新しい生き方」では，日独における若者，高齢女性，女性の居住や生活形態の変遷を，住宅政策や人口動態なども踏まえて明らかにしている。そして第V部「日本社会と生きがい」の最終章では，生きがいという観点からライフコースの変化と日本社会の変容を総括している。

個人の生き方の変容が進む中でも，社会的な規範や制度は持続しており，個人が自分らしく生きるうえでの制約となっていること，そして個人のライフコースに現れた理想と現実の乖離には，ジェンダー化された社会規範や制度の持続が密接にかかわっていることを本書は明らかにしている。国際比較やジェンダー研究の視点をもとに，ライフコースの変化を多面的に論じた豊かな研究成果が，比較研究のさらなる発展をもたらすことを期待したい。